

ヨハネの手紙第一3章1-3節 「神の子と呼ばれる私たち」

1A 御父の愛 1

1B すばらしい愛

2B 世の知らない関係

2A キリストの現れ 2

1B 明らかにされていない姿

2B キリストに似た者

3A 清くする望み 3

本文

ヨハネの手紙第一 3 章を開いてください。今晚は、3 章 1-3 節を見ていきます。「¹ **私たちが神の子どもと呼ばれるために、御父がどんなにすばらしい愛を与えてくださったかを、考えなさい。事実、私たちは神の子どもです。世が私たちを知らないのは、御父を知らないからです。² 愛する者たち、私たちは今すでに神の子どもです。やがてどのようになるのか、まだ明らかにされていません。しかし、私たちは、キリストが現れたときに、キリストに似た者になることは知っています。キリストをありのままに見るからです。³ キリストにこの望みを置いている者はみな、キリストが清い方であるように、自分を清くします。」今晚は、「神の子どもと呼ばれるために」という題名です。**

私たちはヨハネの手紙第一を見ていますが、使徒ヨハネが、どれだけ神が私たちが愛しておられるのか、その愛情を伝えようとしています。また、神に愛されて、神の子どもとなっているのだから、神に似た者として歩むことについても話しています。この二つについて、今晚も見っていきます。

いつもそうですが、この箇所は前の箇所からの続きです。2 章 28 節で、「さあ、子どもたち、キリストのうちにとどまりなさい。そうすれば、キリストが現れるとき、私たちは確信を持つことができ、来臨のときに御前で恥じることはありません。」と話して、キリストが現れること、私たちのために再び来られることについて話しました。その時に、私たちが御前で恥じることはないということ、キリストにまみえる時に、私たちが整えられていることについて語っています。そしてもう一つの新しい話題について話し始めます。それが、「神から生まれる」ということ、神の子どもになったということです。29 節には、「あなたがたは、神が正しい方であると知っているなら、義を行う者もみな神から生まれたことが分かるはずですよ。」と言っています。主が来られた時に、御前に恥じることのないように整えられるのですが、それは神から生まれた者であるからこそ、そうできることを話しています。神が正しいように、御前に入る者たちも義を行う者なのですが、それは神から生まれているからそうなのだ、ということです。3 章は、神の子どもについてのことを話しています。

1A 御父の愛 1

1B すばらしい愛

^{1a} 私たちが神の子どもと呼ばれるために、御父がどんなにすばらしい愛を与えてくださったかを、考えなさい。

「神の子ども」と呼ばれることは、どういうことなのかを考えてみましょう。一般に使われる時は、神によって造られた存在だから、尊いのだよという意味合いで使われます。確かに、そのことは本当です。けれども、神によって造られたということ以上の意味をヨハネは意図しています。パウロが 로마書で説明しています。「8:15-17 あなたがたは、人を再び恐怖に陥れる、奴隷の霊を受けたのではなく、子とする御霊を受けたのです。この御霊によって、私たちは「アバ、父」と叫びます。16 御霊ご自身が、私たちの霊とともに、私たちが神の子どもであることを証してくださいませ。17 子どもであるなら、相続人でもあります。私たちはキリストと、栄光をともに受けるために苦難をともにしているのですから、神の相続人であり、キリストとともに共同相続人なのです。」

子とする御霊を受けたと言っています。これは、養子縁組のことです。永遠の神、天地創造の神、聖なる方で、正しく、全知全能の神は、独り子を持っておられ、独り子も神です。父と子の間には特別な関係があり、両者は一つになっています。その関係の中に、キリストを信じる者が家族として招き入れられた、ということです。イエス様は復活された後に、マグダラのマリアにこう言われました。「ヨハ 20:17b わたしの兄弟たちのところに行って、『わたしは、わたしの父であり、あなたがたの父である方、わたしの神であり、あなたがたの神である方のもとに上る』と伝えなさい。」イエス様が御子として御父に対して持つておられる特別な関係が、弟子たちにとっても父となったということです。イエス様は兄弟となってくださり、私たちの間で長子、つまり長男のように、神の家族の中で第一の方になられた、ということです。

これはものすごいことです！まず、イエス様が父なる神と一つであるような、親しい関係があるように、キリストにあって私たちが神と親しくすることができます。それを可能にするのは、神の御霊です。「この御霊によって、私たちは「アバ、父」と叫びます。」とあるとおりです。御霊が、私たちの霊のうちで、自分たちが神の子どもであることを証してくださいませ。(私も、信仰を持って間もなくしてから、異端の人々に引き込まれそうになった時、とても混乱して、バイト先の休憩時間に、「しかし、私はそれでも神の子どもだ。」という思いが与えられて、それで出て行くきっかけとなったのを覚えています。)それから、「相続人」になったということです。キリストが神の御子として、父なる神のものをすべて持つておられるように、キリストにあって私たちが神のものを相続し、神の国を相続するのだということです。こんなすごいことが、あつていいのでしょうか！ヨハネは福音書において、「1:12 しかし、この方を受け入れた人々、すなわち、その名を信じた人々には、神の子どもとなる特権をお与えになった。」と言いましたが、ものすごい特権です。

そして、ここまでのことをしてくださったのは、「御父がどんなに素晴らしい愛を与えてくださったか」ということですが、次の章、4章で詳しく神の愛についてヨハネは話しています。「4:9-10 神はそのひとり子を世に遣わし、その方によって私たちにいのちを得させてくださいました。それによって神の愛が私たちに示されたのです。10 私たちが神を愛したのではなく、神が私たちを愛し、私たちの罪のために、宥めのささげ物としての御子を遣わされました。ここに愛があるのです。」神が、私たちのためにご自分の独り子を下さったということです。それは、私たちがいのちを得るため、神によって生まれるためです。そして、その御子のいのちが、私たちの罪のための宥めのささげ物として与えられたゆえに、私たちにいのちが与えられたということです。こんなことあるでしょうか！神に対して罪を犯し、神の敵として滅ぼされ、裁かれなければいけないはずなのです。そのような者たちのために、かえってご自分の独り子を、罪のためのささげ物として与えてくださったということです。

神が、滅びなければいけない罪人の身代わりとして、御子をくださったということもすごい愛ですが、そこから、ご自分の息子として御子に似た者として養子にしてくださいましたというのですから、なんという愛なのでしょう！恵みとしか言いようがありません。全くの無条件の愛、敵をご自分のふところにおられる独り子と共に受け入れておられるという恵みです。

2B 世の知らない関係

^{1b} 事実、私たちは神の子どもです。世が私たちを知らないのは、御父を知らないからです。

世は、私たちが事実、神の子どもとなっていることを知りません。そもそも、イエス様がご自分の父と特別な関係を持っていることを、信じていない者たちは知ることができませんでした。ユダヤ人の宗教指導者たちは、このことのゆえにイエス様を迫害しようとしてきました。「ヨハ 5:17-18 イエスは彼らに答えられた。「わたしの父は今に至るまで働いておられます。それでわたしも働いているのです。」18 そのためユダヤ人たちは、ますますイエスを殺そうとするようになった。イエスが安息日を破ってただけでなく、神をご自分の父と呼び、ご自分を神と等しくされたからである。」そして、肉の家族もイエス様のことを理解しませんでした。「ヨハ 7:4-5 自分で公の場に出ることを願いながら、隠れて事を行う人はいません。このようなことを行うのなら、自分を世に示しなさい。」5 兄弟たちもイエスを信じていなかったのである。」

それなので、キリストのゆえに神の子どもとなっている者たちも、世においてはその関係が理解されないのです。「Ⅱコリ 2:15-16 御霊を受けている人はすべてのことを判断しますが、その人自身はだれによっても判断されません。16 「だれが主の心を知り、主に助言するのでしょうか。」しかし、私たちはキリストの心を持っています。」御霊によって、神との関係についてそのすべてを判断できるのですが、その関係については、御霊を受けていない、生まれながらの人々は判断されないということです。だれもが、主の心を知り、主に助言できないのですが、御霊を受けている

者たちはキリストの心を持っているということです。

2A キリストの現れ 2

1B 明らかにされていない姿

2a 愛する者たち、私たちは今すでに神の子どもです。やがてどのようになるのか、まだ明らかにされていません。

使徒ヨハネは、何度となく、「**愛する者たち**」と呼んでいます。愛されているということ、何度も思い起こさせています。彼が伝えたいのは、「**私たちは今すでに神の子どもです**」ということです。世においては、それを知らない、あたかも自分はただの人、あるいは否定的に見られるのでありますが、違います。あなたは今すでに神の子どもです、ということです。

けれども、やがて、目に見える形で神の子どもであることが現れる時がきます。それが、キリストが現れたときです。「**コロ 3:4 あなたがたのいのちであるキリストが現れると、そのときあなたがたも、キリストとともに栄光のうちに現れます。**」キリストが地上に現れる時に、キリストとともに栄光のうちに現れます。これを、パウロはロマ 8 章で、「**神の子どもの現れ**」と呼んでいます。「**被造物は切実な思いで、神の子どもたちが現れるのを待ち望んでいます。(19 節)**」

けれども、それがどのようなものかは、明らかにされていないとヨハネは言っています。キリストが私たちのために再び来られる時、既に死んでいる者はよみがえり、まだ生き残っている者は一瞬にして、その復活の体、栄光の体に変えられます。けれども、それがどのようなものであるかは、いろいろ推測はできますが、何しろ天に属するもの、御霊に属するものなので、今ははっきりと分かりません。パウロは、コリント第一 15 章で、これを土に種を蒔くのに喩えています。血肉の体を私たちは持っていますが、それが朽ちるのは、ちょうど種が土に蒔かれたのと似ています。その種には、その後でどのような芽を出して、茎になり、葉を出して、ついに花を咲かせ、実を結ばせるのか、その情報は入っていますが、種だけではまるでわかりません。同じように、肉体が滅んだ後の復活の体は栄光に富んだものですが、それがどのようなものであるかは、明らかではないのです。しかし、連続性があります。種には、その種のもつ植物しか育ちません。それと同じように、今の自分と、将来の自分は連続しているのです。

しかしそれが、地の塵からアダムが造られたけれども、復活の体は天に属するからだであり、御霊に属する体であることは確かです。

2B キリストに似た者

2b しかし、私たちは、キリストが現れたときに、キリストに似た者になることは知っています。キリストをありのままに見るからです。

天に属するからだか一体どのようなものかは明らかではありませんが、はっきりしているのは、これです。「**キリストに似た者になる**」ということです。これは驚きです。今も私たちは御霊によって、主の栄光を仰ぎ見ながら、キリストの似姿に変えられています。「Ⅱコリ 3:18 私たちはみな、覆いを取り除かれた顔に、鏡のように主の栄光を映しつつ、栄光から栄光へと、主と同じかたちに姿を変えられていきます。これはまさに、御霊なる主の働きによるのです。」しかし、体はアダムからのものであり、御霊によって、罪の力から自由にされますが、からだは未だ自由ではないのです。

しかし、キリストが現れた時は、体を変えられて、キリストに似た体、栄光の体に変えられるのです。「Ⅰコリ 15:52-53 終わりのラツパとともに、たちまち、一瞬のうちに変えられます。ラツパが鳴ると、死者は朽ちないものによみがえり、私たちは変えられるのです。53 この朽ちるべきものが、朽ちないものを必ず着ることになり、この死ぬべきものが、死なないものを必ず着ることになるからです。」ラツパが鳴るのは、キリストが天から降りてこられる時ですが、ピリピ 3 章ではパウロはこう言っています。「ピリピ 3:20-21 しかし、私たちの国籍は天にあります。そこから主イエス・キリストが救い主として来られるのを、私たちは待ち望んでいます。21 キリストは、万物をご自分に従わせることさえできる御力によって、私たちの卑しいからだを、ご自分の栄光に輝くからだと同じ姿に変えてくださいます。」

そして、なぜキリストに似た者に変えられるかと言いますと、「**キリストをありのままに見るから**です。」とヨハネは言っています。先ほど読みました詩篇 17 篇に、御顔を仰ぎ見ているから、自分もその御姿に満ち足りるとダビデが言っていました。「17:15 しかし私は義のうちに御顔を仰ぎ見目覚めるとき御姿に満ち足りるでしょう。」

ありのままの姿を、私たちは見ることのできる恵みにあずかります。今も、目には見えないけれども、キリストを心から愛しているのは、魂の救いを得ているからだ、ペテロが第一の手紙 1 章で話していますが、目に見る時が来るのです。パウロはコリント第一 13 章で、顔と顔を合わせてみると教えています。「Ⅰコリ 13:12 今、私たちは鏡にぼんやり映るものを見ていますが、そのときには顔と顔を合わせて見ることとなります。今、私は一部分しか知りませんが、そのときには、私が完全に知られているのと同じように、私も完全に知ることとなります。」当時の鏡は、青銅を磨いたものなので、鏡といってもはっきりと見えるものではありませんでした。同じように、キリストの栄光の姿について、私たちは当時の鏡のように、信仰の中で見えますが、しかし、完全な方が来られたら、はっきりと見るようになります。

3A 清くする望み 3

³キリストにこの望みを置いている者はみな、キリストが清い方であるように、自分を清くします。

「**キリストにこの望み**」というのは、キリストが現れたら、この方に似た者になるという望みです。

ですから、この方が清い方なので、今の世においても自分を清くするという事です。ヨハネ第一は、「神がこうであられるように、私たちもこうである」という言葉が数多く出てきます。「1:7 もし私たちが、神が光の中におられるように、光の中を歩んでいるなら、互いに交わりを持ち、御子イエスの血がすべての罪から私たちをきよめてくださいます。」「2:6 神のうちにとどまっていると言う人は、自分もイエスが歩まれたように歩まなければなりません。」「2:29 あなたがたは、神が正しい方であると知っているなら、義を行う者もみな神から生まれたことが分かるはずです。」神の子どもである、キリストにあって神と交わっているということは、神のご性質が自分にもあり、キリストの歩みが私たちにも与えられている、ということでもあります。これは、御霊の力なしにはできません。先に読んだ、コリント第二の言葉がそれを示しています。「Ⅱコリ 3:18 私たちはみな、覆いを取り除かれた顔に、鏡のように主の栄光を映しつつ、栄光から栄光へと、主と同じかたちに姿を変えられていきます。これはまさに、御霊なる主の働きによるのです。」

主が戻って来られることを強調するのは、私たちが清い生活を歩むのに大きな動機付けとなります。この方をありのままに見て、自分もその方のようになるのですから、今の生活とかけはなれていたら、恥ずかしいものとなります。ですから、今の歩みを主がいつ来られてもよいように整えておく必要がありますね。イエス様は、思慮深いしもべと愚かなしもべの喩えで話されました。「マタ 24:45-47 ですから、主人によってその家のしもべたちの上に任命され、食事時に彼らに食事を与える、忠実で賢いしもべとはいっただれでしょう。46 主人が帰って来たときに、そのようにしているのを見てもらえるしもべは幸いです。47 まことに、あなたがたに言います。主人はその人に自分の全財産を任せようになります。」主に対して忠実であるということが、必要です。いつ何時であっても、主のあり方と自分を比べて、吟味して、へりくだり歩いていく必要があります。